一葉の生きた時代

パオラ・クッボーネ

一葉の生きた時代、それは明治の政府が成立してから、息をつく間もなく西欧の文明をとり入れ、国会の開設により、まがりなりにも近代化の第一歩をあゆみはじめた時代であった。しかし同時に、欽定憲法、教育勅語の発布によって、その近代化が、日本的な封建性を残したまま推し進められて行った時代でもある。

市民生活の上でも、人情・風俗・習慣は、依然として江戸の名残をとどめていた。

一葉文学の世界に息づく女性たち、たとえば、お峰が、お関が、そしてお力や美登利が生きたのは、このような社会である。

しかし、人々は一葉の中に薄幸の天才を感得し、優婉可憐な悲劇の女主人公たちだけを読むことばかりに急であった。彼女の作品に時々現れる社会の不正に対する批判や硬化した道徳に対する反撥は、決してそれと堂々と闘おうとしたり、抗議の性質を帯びたしんらつさを持ったものではなかった。一葉の本質は、それだけにとどまるものではなかったのである。

もっとも、一葉の作品の中には、「わかれ道」のお京のように、自暴自棄な女性も描かれている。しかし、作中にはげしく論じ、主張し、さからう人物は描かれていないけれども、その作品が、すぐ現実を肯定し、あきらめ、押し流されていたのだとは言えない。むしろ一葉の真価は、作品をつらぬく、しみとおるような嘆きや訴えが、ひしひしと読者の胸に迫ってくるところにある。

まして、晩年の一葉は、未完に終わったけれども、「裏紫」の中に、人妻であって、夫以外の男への愛を誓うお律という女性を描いている。ここでは、自己の愛を積極的に肯定し、男性と同等の地位を志向して生きようとする、いわば新しい女性の生き方を示そうとしている。

一葉の生きた明治二十年代は、帝国議会の開設によって、まがりなりにも近代国家の形をととのえたけれども、公民権も与えられていない女性にとっては、どんなに暗く、重苦しい時代と社会であっただろう。一葉は、愁訴の形で、こうした社会にさからいの声をあげた、近代女性の夜明けの星であった。

一葉の志の型は、「英雄豪傑の伝、仁侠義人の行為などの、そゞろ身にしむ様に覚え」たという、七つのとしの深みにまでさかのぼらなければならない。そのような、いわば倫理的、道義的な一葉は成長して、どのような現実に直面したであろうか。

日記の上で、最初に一葉の社会批判が記されるのは、十九歳の明治二十四年十月四

日である。

「待合といふ物はいかなる物にや、おのれは知らねど、只もじの表よりみれば、かり初に人を待会わすのみの事なめりとみるに、あやしう唄女など呼上て、酒打のみ燈あかうこゑひくく夜更るまで打興ずめり……地そ軽減をとなふる有志家、予算の査定に熱中する代議士、かゝる遊びに費やすこがねのをしからずとは、不学不識のもののしれがたき事にこそ。」

樋口一葉

十九歳の一葉はすでに社会のからくりを見抜いていた。二十一歳の二月には、「文明開化か百鬼夜行か筆こゝろにしたがわば材料は山ともいふべし……」とも記している。一葉にとって当代の文明とは、まさしく百鬼夜行であった。その良心と感受性は、つねにこのような現実に触れ、その日記はまた、国家的、政治的、軍事的、社会的動向に緊張を示している。

このようにして、二十二歳の一葉は、「おもひたつことあり、うたふらく、すきかへす人こそなけれ敷島のうたのあうす田あれにしを。いでやあれにしは敷島のうた斗か。道徳すたれて人情かみの如くうすく、朝野の人士、私利をこれ事として国是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん。かひなき女子の、何事を思ひ立ちたりとも及ぶまじきを知れど、われは一日の安きをむさぼりて、百世の憂を念とせざるものならず……わがこゝろざしは国家の大本にあり。」（明治二十七年三月）と考え、「世のくだれるを嘆きて、こゝに一道の光をのこさんとこゝろざす」と記すのである。

この志の実行は、「かひなき女子」のゆえに、「われは女なり」のなげきゆえに、果たし得ないと考えるのではあるけれども、胸中深くたたえられた志の屈折が、晩年の作品に投影されていったのである。

一葉死の九か月前の日記には次のような記述が見られる。「しばし文机に頬づえつきておもへば、誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとて、そはなすべき事かは。」「あけくれに見る人の一人も友といへるもなく、我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生まれし心地ぞする。我れは女なり。いかにおもへることありとも、そは世に行ふべき事かあらぬか。」（明治二十九年二月二十日）

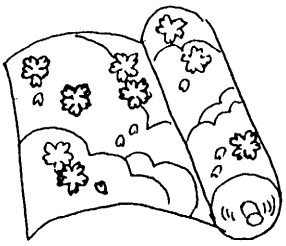
ここには、女なるがゆえに「何事のおもひ」があってもなし得ないという嘆きと同時に、晩年のいい知れぬ孤独な魂のうずきを読みとることができよう。晩年の一葉の心の奥には、はげしいヒューマニズムきびしいモラリズムと同時に、それらとはうら

はらな、色濃いニヒリズムが渦巻いてもいる。

ところで明治の小説の中から代表作を数篇選びだすとすれば、その中に「たけくらべ」が必ず入ってくる。この作品は明治の代表作であるばかりでなく、日本近代文学の中でもきわめて魅力ある作品として、不動の位置を占めている。しかし、一葉が決して「たけくらべ」への評をこころよしとせず、そればかりか、「ことなる事なき反古紙」とさえ記していることの意味を、どう解するであろうか。一葉は「いかなる底意ありてともしらず」とも記している。「底意」とは、観念的とはいえ、「国家の大本」につらなる志向であり、その実践の成就を願い得ぬことにつらなる「われは女成けるものを」という深い嘆きでもあった。

そのような一葉にとって「たけくらべ」の好評は、「ただ女子なりといふを喜びてもの珍しさによるもの」と思うにつけても、ますます「女なり」の嘆きを深めることであり、ほめことばは、むしろ不本意でさえあった。　明治二十九年十一月二十三日午前、一葉は丸山福町の寓居で、その二十四年八か月の短い生涯をとじた。病名は肺結核であった。一葉は、自分の死後、全集の編纂を、斎藤緑雨か、横山源之助に頼みたいと考えていたらしい。それは二人を自分のもっともよい理解者だと思っていたからだ。

一葉の文学は、その主人公たち、お関も、お力も、美登利も、そしてお律も、みんな作者の色濃い分身であり、そうした意味では、一葉はその生涯に、これらの女性を主人公にした、ただひとつの作品を書き続けた作家でもあった。その一葉の文学が、絶えず現代に問いかけるものがあるのは、一葉自身の中にある人間としての願いとかなしみを、作中の人物を介して、個性的、普遍的に生き生きと描き出したことにある。しかもその文学は、社会性と批評性がたくさん含まれており、果たされはしなかったが、その志望の実践を意図し続けた作者によって生み出されていることを忘れることはできない。



作品が、読み続けられている間は、一葉は読む人の心の中に生きている。

①鑑賞と研究　現代日本文学　講座＝小説１　近代文学の曙　関良一　三省堂
②樋口一葉たけくらべ・にごりえ　田中澄江・円地文子訳　明治の古典３　学習研究社
③鑑賞日本現代文学２　樋口一葉　松坂俊夫編　角川書店

④Robert Lyons Danly: IN THE SHADE OF SPRING LEAVES. The Age and Writings of Higuchi Ichiyô, a woman of emeryd in Meiji Japan. New Haven And London Yale University Press, 1981.
⑤Donald Keene: SOME JAPANESE PORTRAITS. Kodansha International Ltd. Tokyo, New York & San Francisco, 1983.
⑥Donald Keene: DAWN TO THE WEST: Japanese Litereture in the Modern Era. Vol. 1 Holt, Rinehart & Winston, 1984.
⑦Maria Teresa Orsi: La Narrativa Happonese Dalla Metà Dellì OttocentoAl Horni Nostri. Opera Universitaria Istituto Universitario Orientiale. Napolri, 1979.